

## 主日礼拝説教「立ち上がる」

日本基督教団石神井教会 2019年2月24日

### 【使徒書日課】使徒言行録 3章1～10節

1ペトロとヨハネが、午後三時の祈りの時に神殿に上って行った。2すると、生まれながら足の不自由な男が運ばれて来た。神殿の境内に入る人に施しを乞うため、毎日「美しい門」という神殿の門のそばに置いてもらっていたのである。3彼はペトロとヨハネが境内に入ろうとするのを見て、施しを乞うた。4ペトロはヨハネと一緒に彼をじっと見て、「わたしたちを見なさい」と言った。5その男が、何かもらえると思って二人を見つめていると、6ペトロは言った。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」7そして、右手を取って彼を立ち上がらせた。すると、たちまち、その男は足やくるぶしがしっかりして、8躍り上がって立ち、歩きだした。そして、歩き回ったり躍ったりして神を賛美し、二人と一緒に境内に入って行った。9民衆は皆、彼が歩き回り、神を賛美しているのを見た。10彼らは、それが神殿の「美しい門」のそばに座って施しを乞うていた者だと気づき、その身に起こったことに我を忘れるほど驚いた。

### 【福音書日課】ルカによる福音書 5章12～26節

12イエスがある町におられたとき、そこに、全身重い皮膚病にかかった人がいた。この人はイエスを見てひれ伏し、「主よ、御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と願った。13イエスが手を差し伸べてその人に触れ、「よろしい。清くなれ」と言われると、たちまち重い皮膚病は去った。14イエスは厳しくお命じになった。「だれにも話してはいけない。ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めたとおりに清めの献げ物をし、人々に証明しなさい。」15しかし、イエスのうわさはますます広まったので、大勢の群衆が、教えを聞いたり病気をいやしていただいたりするために、集まって来た。16だが、イエスは人里離れた所に退いて祈っておられた。

17ある日のこと、イエスが教えておられると、ファリサイ派の人々と律法の教師たちがそこに座っていた。この人々は、ガリラヤとユダヤのすべての村、そしてエルサレムから来たのである。主の力が働いて、イエスは病気をいやしておられた。18すると、男たちが中風を患っている人を床に乗せて運んで来て、家の中に入れてイエスの前に置こうとした。19しかし、群衆に阻まれて、運び込む方法が見つからなかったため、屋根の上で瓦をはがし、人々の真ん中のイエスの前に、病人を床ごとつり降ろした。20イエスはその人たちの信仰を見て、「人よ、あなたの罪は赦された」と言われた。21ところが、律法学者たちやファリサイ派の人々はあれこれと考え始めた。「神を冒瀆するこの男は何者だ。ただ神のほかに、いったいだれが、罪を赦すことができるだろうか。」22イエスは、彼らの考えを知って、お答えになった。「何を心の中で考えているのか。23『あなたの罪は赦された』と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらが易しいか。24人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。」そして、中風の人に、「わたしはあなたに言う。起き上がり、床を担いで家に帰りなさい」と言われた。25その人はすぐさま皆の前で立ち上がり、寝ていた台を取り上げ、神を賛美しながら家に帰って行った。26人々は皆大変驚き、神を賛美し始めた。そして、恐れに打たれて、「今日、驚くべきことを見た」と言った。

## 御名によって立ち上がる

先週、わたしは思いがけず、神学生時代に二年間お世話になった奉仕教会の皆さんからのお葉書をいただきました。わたしが奉仕神学生としてお世話になったのは 20 年も前のことですが、水曜日の祈祷会で「先生の働きのために祈った」とのコメントと共に幾人かの方が寄せ書きをしてくださっていました。そこは、神学生になって初めて母教会を離れて出席・奉仕した教会です。伝道者としての献身を決意して神学校に入学していたわたしが初めて、「牧師になるということは、自分の力で立つて行くことではなく、教会によって立たされるようになることなのだ」ということを教えられ、身に染みて経験させられたのも、その教会だったことを、あらためて思い起こさせられました。もっとも、それは、何も牧師・伝道師など伝道者だけのことでなく、わたしたち皆のことでもあるのです。

今日も教会に招かれてきたわたしたちはそれぞれ、ここで、一人の信仰者・キリスト者として立たせていただいています。もちろん、今朝、自分の意志で教会に向かい、自分の足で礼拝堂まで辿り着いた、という思いの方もありません。日々の生活の中で重い課題を背負い、その日常生活の中から教会へと出て来るために、重たい心を引きずり出すようにして、今朝、起き上がられたのかもしれない。一週間の働きによって疲れ果てた心身を、できれば一日ゆっくり休ませたいとの思いを持ちながらも、教会の奉仕のために、今日の責任のために、自分の心と体に鞭打つような思いを持ちながら来られたのかもしれない。そういう方が、辿り着いたここで礼拝にあずかる中、一人の礼拝者としてどうにか自分の足で立っているという思いを持たれるのも、当然だと思います。けれども、そうだとすると、そのような思いを抱かれている人も含めて、わたしたちは皆、ここで、立たせていただいているのです。自分の力によってではなく、自分の意志によってでもなく、主イエスに立ち上がらせていただき、神の御心によって立たせていただいている。

今日の福音書日課（ルカ 5 章）で、主イエスは、重い皮膚病の人をいやしてくださり、中風を患っている人を立ち上がらせてくださっています。この二人だけでなく、多くの方が病気を癒していただくために集まって来て、実際に主イエスによって病気をいやしていただいていたとも、語られています。この場面だけでなく福音書の物語を通して、多くの者が主イエスによっていやされ、立ち上がらされ、そして、神を賛美する者とされていることを、わたしたちは思い起こすことができます。その人たちは、信じて祈り礼拝するようになったから、いやされ、立ち上がらされた、というわけではありません。主イエスにいやされ、立ち上がらされた人たちの中から、神を賛美し礼拝する者たちが起こされた、のです。それこそが、わたしたち礼拝にあずかり神を賛美する者の姿です。

「主が手を取って起こせば…これぞ神の御業」（446 番）と讃美して歌いました。わたしたちがここに立たされ、神を賛美する者とされている。このようにしてくださった神の御業を目の当たりにすることのほかに、わたしたちが礼拝に望むことは何もないのではないのでしょうか。

## 立ち上がらせるために…

主イエスは、重い皮膚病の者の「**主よ、御心ならば…**」という願いをお聞きくださって、御手を伸べて触れてくださいました。「**よろしい。清くなれ**」とお告げくださり、病を去らせてくださいました。

主イエスは、中風を患っている人が運ばれて来れば、「**起き上がり、床を担いで家に帰りなさい**」とお告げくださって、立ち上がらせてくださいました。

そのような主イエスの御業をずっと見ていた弟子たちは、聖霊降臨の後の教会として生き始めたとき、同じように主の御業が起こされることを信じて、主の御名によって告げたのです、「**わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい**」と。

使徒書日課（使徒言行録3章）の語るこの出来事は、わたしたちの教会の営みの中でも起こるはずのことを示しているのでしょう。

もちろん、わたしたちには少しは金や銀があるかもしれませんが。自分たちのためだけでなく、さまざまな他の団体の活動のためにも、わたしたちは献金をささげます。いつもの用意のある中からお献げするものだけでなく、わたしたちはたとえ用意がなくても、与えられているものの中から取り出して精一杯、主の御業のためにささげようとするのではないのでしょうか。わたしたち自身が、主の御業によって今立たされている者であるからこそ、主の御業がさらに豊かになされることを願って、与えられているものの中からできるだけ惜しむことなくささげたいと思うのです。

そうだとしなご、わたしたちの為すことの土台になっているのは、弟子たちが足の不自由な一人の男に告げたあの言葉に集約されている、というのでも確かなことでしょう。「**そう、わたしたちには金や銀はないとしても、持っているものがある。与えられているものがある。主イエス・キリストによって立ち上がらせていただいたという、主の御業の事実。御心によって礼拝にあずかせていただいているという、神の御業の事実。この御業の事実を、あなたにも届けたい。この御業の恵みを、あなたにもあげたい。さあ、わたしたちと一緒に、立ち上がらせていただきますましょう、歩かせていただきますましょう。主イエスの御名によって！**」

それは、わたしたちに託された働きでしょう。わたしたちの中の誰かに、ではなく、わたしたち皆に託された働きでしょう。何となれば、それは、弟子たちにではなく、名も知れぬ「**男たち**」によってまず始められたのです。

福音書日課で中風の人を主イエスのもとまで運び連れてきた「**男たち**」。それは、どんな人たちだったのでしょ。福音書は、何も説明をしません。だれでもないし、だれでもあるのです。ただ彼らは、一人の中風の人を主イエスのもとまで運びました。多くの人が主イエスを取り囲んでいるという障害をものともせず、屋根の上から、瓦を引きはがして吊り降ろし、一人の人を主イエスの近くまで運んだのです。彼らは、だれかに命じられたのでもなく、だれかからの報酬を期待してでもなく、そうしたのではなかったのでしょうか。

## 「人よ、あなたの罪は赦された」

その結果、中風を患っていた人は、主の御業を見ることになりました。自分自身の身に主の御業が起こったこと、主によって立ち上がらせていただき、自分の足で歩く者としていただいたということを、知るようにされたのです。

しかし気になるのは、あの「男たち」です。屋根の上から天上がはがされ、中風の人が吊り降ろされて来たとき、主イエスはもちろん、その中風の人を御覧になられたはずです。だれもが、その一人の病人に注目したでしょう。けれども、福音書は、そのとき主イエスがその「男たち」に目を向けられたと物語るのです。

「**イエスはその人たちの信仰を見て…言われた**」。

そのとき、弟子たちは何をしていたのだろうかと思います。主イエスの一番近くに座って、教えを聞かせていただいたり、いやしの御業を見せていただいていたのかもしれませんが。あるいは、次々に連れて来られる病人たちの整理をし、主イエスに見ていただく順番を決めたりと忙しくしていたのかもしれませんが。弟子たちは皆、主イエスのお働きに仕えようとして、そこにいたのではないのでしょうか。主に仕えるというのはそういうことだと、わたしたちは考えるところがある。主に一番近いところにいること、主のお働き、その御言葉や御業に直接貢献する奉仕にあたること、それが主に仕える貴い姿だと思っているところがある。もちろん、それは貴いことでしょう。それなくして、主の御業も御教えも、人々に届けられることはなかったでしょう。けれども、そのとき主イエスが注目されたのは、一人の人を遠くから運んで連れてきた「男たち」の姿でした。彼らの姿こそ「信仰」を御覧になられたと、福音書はわたしたちに物語っているのです。

その一人の人、中風を患っていた人は、その「男たち」がいなければ、主イエスのもとに近づくことがいつまでもできなかつたかもしれません。立ち上がらせていただくことも、歩き出すことも、ずっとなかつたかもしれません。神を賛美することを通して、周りの人々をも驚かせ、その人たちと共に神を賛美するようになることも、なかつたかもしれないのです。

そこで起こったことを想像するならば、主イエスがそのとき、「**あなたの罪は赦された**」ということの意味を、わたしたちは悟らせていただくことができるのではないのでしょうか。それは、神だけが為してくださる御業に違いありません。けれども、人に託されている御業でもあるのです。「罪赦された者として、互いに赦し合う関係に立つ」ことによって、です。それは、あの「男たち」にも託されていたし、わたしたちにも託されている御業です。

主の前に進み出るのは、一人の人を、わたしたちが主の前へとお連れするのです。主の前に集められた群れの真ん中に、その外から一人の人をお連れし、立たせるのです。主が立たせてくださるからです。わたしたちの真ん中に、わたしたちがお連れした一人の人を、主は立たせてくださり、歩き出す者としてくださり、神を賛美する者としてくださる。わたしたちと共に。

そうであれば、わたしたちも再び立ち上がり、神を賛美しつつ歩き出す。一人の人を、互いに赦し合い受け入れ合う者として、ここにお連れするために。